

## 研究ノート

### ヴェールトのウェールズ旅行

高木 文夫

1843年暮れにブラッドフォードに得た新しい職場で働きだしたヴェールト Georg Weerth (1822-56) は1844年10月の初旬、合間を縫って、ウェールズへ旅に出る。この時の旅について直後に母親宛の書簡で簡単に報告しているが、そこで述べられていることは要点のみで、具体的な日程や旅先については大まかにしか触れていない。しかし、この手紙で重要なこととしては、旅の動機として、「これまで数ヶ月間一生懸命に働いて疲れた心身を癒やすため」だということをあげ、「アイルランドやウェールズの自然が元気を回復<sup>(1)</sup>」してくれるだろうと思ったと述べていることである。実際に以下に見るように、この旅で接したウェールズの自然は彼の心身の疲れを回復させたようである。この旅行について彼が詳しく述べるのは、翌年の1845年7月19～26日付けの『ケルン新聞 *Kölnische Zeitung*』(以下 *KZ*) に連載した『おどけた旅 *Scherzhafte Reisen*』においてである。ちなみにこの連載紀行文は後になりに手を加えられ、「ウェールズの旅 *Reise nach Wales*」と標題も改められて、未刊行の紀行文集『イギリス・スケッチ *Skizzen aus dem sozialen und politischen Leben der Briten*』(1849年)<sup>(2)</sup>に収められる。

少年時より旅行に憧れ、10代半ばに故郷デトモルトを出て以来、ビジネスマンとして旅に出ることが多かったヴェールトの旅行のその傾向は、彼が旅行に際して最も

(1) 1845年10月19日付け母親宛書簡。Georg Weerth. *Sämtliche Briefe in zwei Bänden*. Hrsg. u. eingel. v. Jürgen-Wolfgang Goette unter Mitw. von Jan Gielkins. Campus. Frankfurt a. M. /New York. 1989 Bd. 1. S. 269

(2) Vgl. Georg Weerth. *Sämtliche Werke in fünf Bänden*. (以下 *SW*) Hrsg. v. Bruno Kaiser. Aufbau. Berlin. 1956/57. Band 3. S. 416-460

関心を持っていたことに従えば、産業革命及び市民革命の二重の革命への旅とそれの反対方向の傾向を持つ、いわば「非近代的な世界」への旅に分けることができることはすでに指摘したことであるが<sup>(3)</sup>、ウェールズは元々イングランドを中心とするイギリスの一部であるので、ヴェールトの旅の分類では前者の旅に入るように思われがちだが、以下に見るように、実際には産業革命とそれに伴う社会変革へ重点をおいたものではなく、むしろ自然体験を中心にした、後者に分類されるべき内容である。本稿はこのような観点から、後のポルトガル・スペインおよびラテン・アメリカへの旅につながる<sup>(4)</sup>、ヴェールトのウェールズ旅行について、主として『おどけた旅』を元に紹介し、考察してみようというものである。

さて、前掲母親宛書簡および『おどけた旅』に記されている限りでは、旅の正確な行程は確定することは難しい。しかし、両者から分かりうる限りでは、ヴェールトの行跡は以下のようで、かかった日数も数日程度のものである。

- 1) (ブラッドフォードを出発後) マンチェスターで「ジョン・マックアダム」号に乗船、マージー川を下り、リヴァプールを通過して、海に出る
- 2) マン島、ウェールズ最北端のオームス・ヘッドを臨みながら、海岸線に沿って、アイルランド海へ
- 3) バンゴール湾を航行 (右手にアングルシー島、左手にウェールズの間山々を臨む)
- 4) 北ウェールズに上陸、アングルシー島とウェールズを結ぶメナイ橋を臨む
- 5) カエルナヴォン訪問
- 6) ランベルス峠を越えて、ランベルス村へ
- 7) スノードン登山
- 8) (リヴァプール、マンチェスターを経て) ブラッドフォードへ帰還

(3) Vgl. 拙稿「ヴェールトのポルトガル・スペイン紀行」(『香川大学経済論叢』第71号第4号, 1999年, 145~146ページ)

(4) ヴェールトのポルトガル・スペインやラテン・アメリカへの旅については前掲拙稿「ヴェールトのポルトガル・スペイン紀行」および拙稿「ヴェールトのラテン・アメリカ旅行」(宮崎揚弘編『続・ヨーロッパ世界と旅』法政大学出版局, 2001年, 387~408ページ)を参照されたい。

ウェールズは周知のように、アイルランドやスコットランドと同じようにケルト系の土地でありながら、イングランドに侵略され、併呑されるのが早く、その象徴のように現在の連合王国国旗「ユニオン・ジャック」にもウェールズは組み込まれていない。ただ、イギリスの皇太子の称号として「プリンス・オブ・ウェールズ」が残されているだけである。その点で強く自己主張するアイルランドやスコットランドに比べて影の薄さは否めない。ヴェールトにしても他の地方に比べ、ウェールズに言及しているのはほぼこの旅に関する上記二点だけである。<sup>(5)</sup>

そのようなウェールズ旅行で得た彼の印象はどのようなものだろうか。紀行文『おどけた旅』は、地の文章で旅の行程を述べるとともに、船で知り合ったドイツ女性とその知人親子とのやりとりの中で様々な逸話が語られるという形式によっている。まず、枠の、旅の実際の行程に従って、興味深く述べられているのは、旅の折々に姿を現す、ウェールズの自然についてである。このような世界に入るとは語り手である「私」、即ちヴェールトにとって、普段過ごしている工業都市の世界を脱し、非近代的な異世界に入っていくことと同じである。その分岐点となるのは商工業を象徴する都市、リヴァプールとの一時的な訣別である。

「リヴァプールをまもなく背にしたことが私は心の奥底で嬉しかった。高い建物を見たが、小さな人々と大きな商人がいるほかにいくらかの世界的な商業がある、うんざりする町だ [後略]」(KZ Nr. 200, 19. Juli 1845)<sup>(6)</sup>

リヴァプールを離れると、船はアイルランド海を渡り、大きく弧を描いてウェールズの最北端に向かう。荒海の中を行く船から見る自然はすでに新たな驚きの連続である。

(5) ウェールズの事に関しては、田辺雅文・小嶋三樹『ウェールズ 英国の中の“異国”を歩く』(日経BP社, 2002年<sup>2)</sup>)及び永井一郎「ケルト外縁とイングランドーウェールズの場合」(『岩波講座 世界歴史7「ヨーロッパの誕生」』(岩波書店, 1998年, 81~107ページ) 他を参照した。

(6) 1845年7月19日付け「ケルン新聞」第200号。以下においては、「ケルン新聞」掲載の『おどけた旅』からの引用についてはこのように号数及び日付を記すことにする。

「朝の間中殆ど朧気に岸辺を遠くに見ていただけだった。砂丘がとても遠いところでは海だけが水平線になっていた。だから、突然海間から荒々しい岩礁が飛び出したときには私たちはひどく驚いた——乗客は甲板の端に押し寄せた。『グレイト・ホームズ・ヘッドです』と船長が叫んだ。眼前の草色の波の中にバラ色の岩の塊があった。」(KZ Nr. 201, 20. Juli 1845)

そこへ突然強い風が吹いてきて船はさらに揺れを増し、船の上は乗客や船員たちが上を下への大騒ぎとなるが、やがてバンゴール湾へ入ると波も落ち着き、進行方面の右手にアングルシー島が、左手にウェールズの間山々が見えてくる。一行は上陸した後、ホテルで嵐の海の疲れを癒やすが、そこからはウェールズとアングルシー島を結ぶ、巨大な吊り橋「メナイ・ブリッジ」を臨むことができた。この橋は1819年に建造が開始された、近代化の象徴である。ヴェールトは夜になって、この橋を渡ってみる。

「その間外では夜がとても愛らしく魅力的な姿を繰り広げていた。私は海峡に沿って歩き、巨大な橋を渡って、アングルシー島に散歩に出かけた。そこからはウェールズの間山々が最もよく見える。陰しくギザギザした輪郭が月で明るい空と見事な対照をなしていた。何もかもが静かで、波だけが小さな音を立てて、岩の多い岸に打ち寄せていた。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

北ウェールズの間自然はヴェールトの目に魅力的に映る。翌朝彼らはカエルナヴォンからランベリスの間峠を越えて先に進む。

「我らが仔馬は楽しそうにだく足で前進した。ある時には泡立つ森の小川に架かった橋を渡り、またある時は丘や岩場を越えて——湿原や野原を抜けて旅は続き、ついに不意に立ち止まって海の間濃い青の流れに身を映した。

自然がここでは三つの色を使ってこれ以上ないほど雄大に絵画を描いている。そこでは青い水が周囲を黒い岩に囲まれ、長い縞になって、岩の間縦穴の間中には燃えるような優しい赤色があった。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

峠を越え、海岸沿いに馬で駆け抜けるとやがてランベルスの村に到着する。この村で一行は補給を十分にした後再び旅を続ける。目的地はスノードン山頂である。

「海から見ると北ウェールズの間々はほどほどの丘の上のようにしか見えなかった。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

最初山の穏やかさは故国ドイツのライン地方で馴染みのそれと同じように見えた。しかし、進むに連れて、次第に違う様相を見せるようになる。

「ただ、左右に暗い峡谷が底に湖を湛えており、聳えだちながら益々巨大な塊となって荒れ果て暗く、そして不気味で、繰り返して険しく粉々になって、常に新しい、幻想的な岩の一团を見せていた。この一帯を飾る一本の木も、一本の灌木もなかった。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

そしてさらに山を登ると、次第に新たな視界が広がって来る。

「まずはランベルスの村が湖とともに、そしていくつかの丘の上に、破壊された砦の残骸およびメナイ海峡とアングルシー島が、すぐにその全貌が目前に現れた。開けた海の眺望はさらに巨大な山の背が遮っていた。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

そうしてついにウェールズの最高峰スノードン山に登頂する。しかし、行く手を阻むように突然霧が峡谷から昇って視界を遮ってしまう。

「私たちはそれを悔やむに及ばなかった。[中略] 自然は厳かなスノードン山頂からのみ、不意に素晴らしいものを見るようにと頭の回りに雲のベールを巻き付けたのである。」(KZ Nr. 207, 26. Juli 1845)

果たしてその期待は裏切られることはなかった。山頂に到着すると間もなくアイルランド方面からの風が霧を振り払って、眺望が眼前に広がったのである。

「永遠なる太陽が晴れ渡った明るい空をきらびやかにさまよって来て、海の大波が光り輝いた。青い遠方の右手にはスコットランドの山々の頂が、左手にはイングランドとウェールズが、そして私たちの前には海が、限りない海が[後略]」  
(KZ Nr. 207, 26. Juli 1845)

この後下山したヴェールトは連れと離れて帰途につく。ウェールズで見た自然の数々はブラッドフォードやマンチェスターなどの工業都市で普段目にしているのとは対照的な風景を見せていて、ヴェールトが心を引かれて楽しんでいる様子がよく分かる。しかし、この時ヴェールトが居住し働いていたブラッドフォードも数十年前、産業革命によって相貌を一変させられる前は、旅先と同じように<sup>のどか</sup>長閑な風景が広がる農村地帯だったのである。

『おどけた旅』はヴェールトの実際の旅の行程を淡々とつづるだけではなく、新聞に掲載される紀行文として、読者に愉快的読み物として、旅先に関わる様々な逸話を供している。その重要なものとして、いわば、「(ウェールズという現在の)非近代的な異世界への旅」と並んで、「ウェールズの過去への旅」を綴るものとして、ヴェールトは紀行文中において、ウェールズの<sup>バ</sup>放浪吟唱詩人の逸話やカエルナヴォン年代記の一挿話を、旅の船中で知り合ったドイツ女性とその知人親子に知識をひけらかすように語っている。まず最初に彼はウェールズがケルト民族の土地であることやイングランドに侵略され、支配されたこともこの紀行文中において、述べてはおれない。

「アングルシーには昔ドルイド教徒が住んでいました。しかし、ドルイド教徒たちは殴り殺されて、それ以来死に絶えているのです。ドルイド教徒たちは退屈な連中で、根や草で栄養を取り、まずいフランス語を話し、殴り殺しあったのです。今とてもすばらしい月光を浴びて私たちの前にある島は後にイングランドの支配下になりました。もし今日ロンドンで手紙を書き、1ペニーで女王の肖像の

ついた切手を買って、この切手を封筒に張り付け、郵便局へ持って行き、「ごきげんよう、私の手紙よ」と言います、すると手紙は貴方が望むところ、まさしくアングルシーに到着するのです。貴方はただ切手を正確に、女王の頭を上にして張らなければなりません。](KZ Nr. 203, 22. Juli 1845)

このこと以外は、いずれも話の主題は男女間の「愛の誠」についてである。最初に語られるのは放浪吟唱詩人ダフィド・アブ・グウィルムの話である。

「ダフィド・アブ・グウィルムはつまり 14 世紀初めアングルシー島、ウェールズあるいはどこか他の場所で生まれた騎士歌人の、言うに言えぬほどに美しい名前なのです」(KZ Nr. 205, 24. Juli 1845)

と始まり、ダフィドが「一度に 24 人の恋人を楽しませた」ことが語られる。若かった彼はある時様々な階層、身分の女性たち 24 人一人一人に宛てて簡潔な手紙を書き、全員を指定した日時と場所に集合させる。当日ダフィド自身はなかなか姿を見せないが、集まった女性たちは彼からの手紙は自分にだけ届けられたと思っていたので、大勢の恋敵の出現に不愉快になり、ダフィドへの怒りを露わにする。ダフィドがようやく彼女たちの頭上の枝から姿を現し、女性たちに互いの嫉妬心を掻き立てたので、彼女らは互いにいがみ合いや喧嘩を始めるのを尻目に彼は姿をくらましてしまう。女性たちをみんな袖にしてしまったダフィドの不実の話は、聞いていた女性を憤慨させてしまう。もう一つ、後になって語られる同じダフィド・アブ・グウィルムの話は、彼ともう一人の吟唱詩人の不和が主題である。真実としては互いに尊敬しあっていたが、小さな諍いから不和になっていた吟唱詩人は友人たちの取り計らいで仲直りをする。ダフィド・アブ・グウィルムの最初の話で不実な男について語ったので、もう一人の吟唱詩人のエピソードでは 50 年もお互いに思い続けた恋人たちについて語る。若いときに永遠の愛を誓った男はやむを得ず戦場へ出かけ、囚われの身になり、50 年経ってようやく帰郷が叶い、やっとのことで昔愛を誓った小屋にたどり着く。

「すると、ほら、彼が扉の前にやってくるとちょうど50年前と同じように苔むした石の上に女性が座っていました。それは老年の婦人でした。彼女は両手を合わせ、眼を閉じていました。眠っていたからです。老人は彼女に話しかけて、恋人のことを聞こうとしました。彼女がまだ昔と同じように若く美しいとしか思っていなかったからです。しかし、話しかけようとしたとき彼はことばがまったく見つかりませんでした。それほど心が悲しかったのです。彼はその老婦人に近づきましたが、まるで彼が彼女の唇に三度接吻することしかないような気分でした。それで実際にそうしたのです。婦人が目を覚ましました。善良な二人は長いこと互いにその年老いた眼でまさしく真剣に見つめあっていました。しかし、一方が相手を50年前に心から抱擁したことや二人が今でもかつてのように互いに愛し合っていることに気づいたとき、二人の頬を澄んだ涙が流れ落ちました。」

(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

男の心に昔の旋律が浮かび、震える声で歌うと、女性も唱和して、二人の愛情が変わらないことを確認したとき、女性は眠るように息絶え、男はその後自分も亡くなるまで歌を歌い続ける。吟唱詩人とは直接関わりを持たない、カエルナヴォン年代記の挿話も男女の愛情が主題である。ウェールズのとある領主に仕える男たちがスコットランドの戦場に出かけ、そのまましばらく音信不通になり、残された妻たちは夫たちが死んだものと思って、下僕たちと再婚する。しかし、ある日突然元の夫たちが帰ってきて、危うく妻たちを巡って新旧の夫たちの争いになろうとするが、領主が計らって元の夫たちに新しい妻をあてがうことで落着する。このように旅行先にまつわる話を挿入することで、その土地の持つ歴史を垣間見せ、紀行文に膨らみをもたらしめている。

上記の挿話はウェールズの「過去への旅」であったのに対し、『おどけた旅』では一方で「現在」<sup>(7)</sup>、特にヴェールトが働いているイングランドの現実に関わることに

(7) 『おどけた旅』を加筆修正して、「ウェールズの旅」として収めた『イギリス・スケッチ』の構成については、拙稿「ヴェールトの『イギリス・スケッチ』の成立と構成」(『香川大学経済論叢』第74号第2号, 2001年193~210ページ)を参照されたい。そこでは『イギリス・スケッチ』の構成として、「過去への旅」と「現在の旅」が二重構造を担っていることを指摘しているが、これはすでに『おどけた旅』の構成にも当てはまる。



触れられている。それは、旅の道連れの一人である「木綿貴族」<sup>コットン・ロード</sup>、マンチェスターから来た、ミスター・ジョンに体现されている。彼の住むマンチェスターはヴェールトの働くブラッドフォードと同じように工場が多くそそり立ち、無数の煙突が聳え、数多くの労働者が居住し、働く工業都市である。ミスター・ジョンは工場労働者や下層の人々について偏見を持っている。この旅行の初めに一行が見かけた船員たちについて彼は次のように述べる。

「あの不幸な船員たちはあのよう生活しているのです。青春期の初めにはもう海に出てすぐに陸地を憎むのです。だらしのない奴らですよ、あの船員たちは。長い旅を終えて港に入ると彼らには賃銀が支払われます。ふつうは僅かな額です。何故なら彼らは航海中は何も使うことができないのですから。しかし、得たものを賢く扱い、休息の日々を陽気に味わう代わりに彼らは船からただちに手近の酒場に飛び込んで無意味に叫び、踊り、歌って、酩酊するととても汚いあまっこたちが彼らを介抱しますが、彼らから盗みを働き、路上に放り出すのです。彼は路上で翌朝金もなく、ぼろぼろの服を着て眼を覚まします。手当たり次第に船に乗って新たな旅に出ること以外にあの哀れな人間たちにできるでしょうか。こんなふうに彼らはこの港でもあの港でもはちゃめちゃなのです。歳月が過ぎると彼らはやがて心がすさみます——あんな人間がいるなんてなんて悲しいことでしょう。」(KZ Nr. 200, 19. Juli 1845)

彼は船員たちがどうしてこのような境遇に陥るのかということに全く理解を示そうとしない。彼は労働者に対しても同じ見方をしている。

「工場の労働者とちょうど同じです。彼らも下賤な人間たちです。私は確約しますよ。あんな労働者は決して次の日のことを考えません。だからあんなに頻繁に不幸になるのです。私がある労働者に週につき30シリング渡すと彼は1ペニーだって残しません——15シリング与えても素寒貧です、ただ30シリングの場合10回酔っぱらい、15シリングの場合は5回だけ酔っぱらうという違いがある

だけです。しかし、酒酔い以上に心や身体に有害に働くものはありません。故に、労働者には少ない賃銀を与えるべきです。そうすると彼らのことが最も良く気づかえるのです。彼らには30 シリングの代わりに15 シリング与えるべきです——そうすると彼らには生活するには充分で、羽目をはずすには少なすぎることになるのです。イングランドの高賃銀、それが労働者階級のおぞましい風紀紊乱の原因なのです。よろしいですか、私がこの件についてはよく<sup>わかま</sup>弁えていることは確かです。30 年来私はこの原則に従っています。」(KZ Nr. 201, 20. Juli 1845)

労働者の乱れた生活は飲酒のせいであり、彼らに賃銀を多く与えるのは、飲酒や遊興に使うばかりで、彼らにとってもよろしくない、もっと少なくても良いという考えはヴェールトは他の著作でも紹介している<sup>(8)</sup>し、上層の人々にとってはむしろありふれた考えだった。彼は酒で労働の苦しさ、居住条件の悪さを耐えなければならなかったと<sup>(8)</sup>考え、即座に、ミスター・ジョンに対し、「それでお金持ちになられたのですね。」と<sup>(8)</sup>言い返し、

「集会で君は奴隷の解放に夢中になって、最も遠い諸国民への不安から君の幸福の建設者である君自身の労働者がトルコ人やイロコイ族やブッシュマンよりもみすばらしい恰好で歩き回り、虐げられた黒人たちよりももっと虐げられていることをすっかり忘れてしまった。」(KZ Nr. 206, 25. Juli 1845)

と考える。そこへ船内で船員たちの喧嘩が起こり、ミスター・ジョンは呆れたように、彼らを蔑み、他の人たちも同調する。しかし、ヴェールトは彼らの境遇について思いを巡らす。

「私は<sup>ロード</sup>卿とともにそこに残された。この善良な男は心地よく眠り込んでいた。両手を『タイムズ』紙の上に組んで、頭は大きな椅子の背もたれの後方に沈んで

(8) 『イギリス・スケッチ』第7章「イングランドの労働者 *Die englischen Arbeiter*」他

いた。ランカシアの男にふさわしく短く力強い両足を真紅の絨毯の上に大きく広げていた。安らかな方、幸せな商業貴族よ、君のまどろみは何と優しいのだろうか。どんな魅力的な夢が今お前の永遠の魂の前を漂って過ぎてゆくだろうか。ひょっとしたら君は幼年時代を、嵐のような青春時代を思い返しているのだろうか——君がまず天日晒場で一本の糸に水を注いだところだ。黄金色のキンポウゲの間から予言するように君に向かって頷いている。君の眼の前がすっかり黄金色になった。それで君の休まない精神は大胆にこれ以上ないほど向こう見ずな計画を構想する。『私は産業に神殿を建てつもりだ。』こんなふうには君のサクランボ色の唇から響いてきた。君は一番近い料理屋に行き、水で割ったブランデーをグラスに一杯飲み、己の件をずっと確信するようになり、再び黄金色のキンポウゲがこの後の数年間牧草地に花開く時には、すでに乳白色に塗られた工場が田舎を覗き、巨大な煙突があたかも独りぼっちの人指し指のように、通り過ぎて行く人々に指示するようになるほどその件を確信していた。『旅人よ、お前が誰であっても静かに立ち止まれ。ここに私は住むのだ。』（KZ Nr. 206, 25. Juli 1845）

産業革命を達成して、イングランドの工業はさらに世界的な規模で市場を求める。その世界的な広がりはこの紀行文でも言及される。眠っている、「木綿貴族」ミスター・ジョンについてヴェールトは、

「おとなしい雄牛が最初君の機械を動かしていた。しかし、君は雄牛をほふり、ブンブン唸り声を上げる車輪の前に蒸気を繋ぎ、君の魂が常に増加する巨大な帳簿の数字の列に歓声をあげている間に車輪が唸り声を上げ、機械がうめき声を上げた。真の世界意識が彼を捉えたのである。君は原材料の輝きで古い宿敵のトルコ人を——同情はすばらしい美德だ——そしてのっぼのイロコイ族やブッシュマンを飾りたてた。」（KZ Nr. 206, 25. Juli 1845）

という。同じ船に乗って、喧嘩をしていた船員たちもインドのカルカッタから帰って来たばかりである。このような観点については、『おどけた旅』ではなく、『イギリス・

スケッチ』の一章「ウェールズの旅」へと加筆された部分に言及があり、そこではイギリスだけの支配する世界ではなく、すでに未来の支配勢力としてのアメリカにもヴェールトの眼は向いている。ここに『おどけた旅』以降 1848 年革命に至るまでの彼の認識の深まりと視野の拡大を見ることができよう。

「外見の違いに関わらない内面の大きな類似はまさしくブリタニア人とアメリカ人を不倶戴天のライバルにしている。アメリカ人がブリタニアの権力を嘲笑し、どの商船もきわめて短期間に戦艦に変身できる様式で建造させているのは理由のないわけではない——そしてブリタニア人がアメリカの暴力を外交のあらゆる手管を使って妨害し、基盤を崩そうとして嘲笑するのも理由がないわけではないのだ。

もちろんこの瞬間に敵同士が会談することの結果は疑わしいだろう。何故ならまだブリタニアの艦隊があらゆる海を強力に支配しており、僅かな時間で彼らは住民たちの商業をお終いにし、国民全体の企業精神を限界まで押し戻して、アメリカの海岸にある都市をすべて撃ち落としてしまうことだってできたのである。

しかし、それでもアメリカ人たちを再び完全に強くならせ、物事の転換を引き起こすにはほんの僅かな年月しかかからないだろう。何故ならイングランドが世界のあらゆる地域で所有物を守らねばならないこと、イングランドはアイルランドの革命と自国の労働者の置かれた状態に暴動と危機の永遠の源泉を持っていることの他にも、アメリカ人にとってもまだイングランドの権力と現在の世界における位置を根拠づけるあらゆる品目で賠償金の義務があるからだ。

金、穀物、木綿、羊毛、石炭、鉄、木材が豊富で、蒸気力で大西洋ならびに太平洋を越えてアジア大陸とヨーロッパ大陸の間の仲介をしている状態によってアメリカの北部は巨大な広がりを持ち、無尽蔵の生産力によってその文化の最初の一世紀のうちに巨人としてあるが、この瞬間にそれに対し、身震いしたのはイングランドだけではない。いや、東方の諸国民が遠い西方からの自由の叫び声に心と体で答え、競争のおぞましい法則を諸国民の平和で人間的な共同作業へと変身させるであろう諸国民の兄弟愛と調和をもたらさなければ、古いヨーロッパ全

体はひょっとしたらその巨人の前にいつかは跪かなければならないのである。」<sup>(9)</sup>

母親宛の書簡、『おどけた旅』そして「ウェールズの旅」と、ヴェールトの1844年10月のウェールズ旅行について伝える三点の文章があるが、そこにはそれぞれに著された時期によって、ヴェールト自身のイングランドやイギリス全体、さらにはヨーロッパや世界全体に対する認識の深まりの差が出ている。実際にこの期間にはエンゲルスやスコットランド人医師マクミキャン、ラジカル・リフォーマーのジャクソン、チャーティスト等の人たちとの交友、社会運動の現場に居合わせたこと等の影響があり、それはこの時期に成立した他の抒情詩および散文と関わりを持っている。<sup>(10)</sup> 1844年から1845年にかけて、さらにはそれ以後1848年の革命にかけて、革命家としての立場を鮮明にしていく過程が、三つの叙述の差として現れている。勿論、母親宛の書簡と他の二つとは叙述の性格の違いが大きいので、書簡に書かれていないからと言って、ヴェールト自身が紀行文に書いたことを考えていなかったとは断定できない。一つ言えるのは、ウェールズ旅行は、前述の革命後のポルトガル・スペインやラテン・アメリカへの旅行のように、工業化されようとしている社会とは異なったものを見聞し、自然に触れることで心身のリフレッシュを行おうとの意図が根底にあるが、ブラッドフォードやマンチェスターなどに象徴される近代的な社会との対比が色濃く映し出され、自然体験を粹あるいは基底としていながら、特に後者への関わりを断ち切ることができないことに特徴を有している。このヴェールトのウェールズ旅行及び紀行文『おどけた旅』（あるいは「ウェールズの旅」）についてはこれまでのヴェールトについての文章では殆ど触れられてこなかった。<sup>(11)</sup> この旅行の意義は勿論過大評価されるべきではないが、最先進工業国のイギリス国内での、工業化の未だ及ばない地域への旅行とその紀行文、特に自然と過去、そして工業化されたイングランド社会間の対比について、1848年革命後の旅行との違いはあるものの、上のようなヴェールトの、ウェ

(9) SW Bd. 3 S. 420 ff.

(10) 詳しくは前掲拙稿「ヴェールトの『イギリス・スケッチ』の成立と構成」197～203ページの「成立年表」及び「関係年表」を参照されたい。

(11) Zemke, Uwe: *Georg Weerth. Ein Leben zwischen Literatur, Politik und Handel*. Droste. Düsseldorf. 1989. 他

ールズ旅行における体験と見解はその後の彼の展開と関わりを持っているということが  
ができる。